

正体見たり

田辺茂一



乙
体見
たり

田
川
家
一

しょうたいみ
正体見たり

一九七二年六月五日印刷
一九七二年六月一〇日発行

著者 田辺茂一
たなべもいち

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話 東京(03)二六〇一一一

振替 東京八〇八

印刷 金羊社

製本 植木製本

定価 五〇〇円



© 1972 Moichi Tanabe
Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取替えます。

正体見たり・目次

多 少 佛 心

七

サ ー カ ス 稼 業

元

正 体 見 た り

セ

軸 の ま わ り

允

一 夜 の 悪 夢

二
元

ハーモニカ横丁

三五

遠い昔のはなし

一七

改装成る

一〇一

島流し

二七

正
体
見
た
り

多
少
佛
心

画のグループで、竹林会というのがある。一年に一度ぐらい銀座の文芸春秋画廊で、展覧会を開いている。素人画家の集りだが、同人には、石川達三、福田蘭童、石垣綾子、草野心平ほか、何人かいる。

みんな私の友人ばかりなので、招待状がくると、便利な場所だから、この二三年必ず、私は観に行っている。初日は、軽い飲物の用意もあって、パーティ形式である。

この春も開かれたので、私はさっそく出かけて行った。

回を重ねて、みんなそれぞれに腕達者になっている。

ことしはその会場で、一隅に、内田吐夢さんのめずらしい蒐集品が飾られていた。木工品のようなものや、形の変った貝殻類である。木工品というと、工芸品になるが、そうではない。自然の木片のようなものである。壁にかかっていたそれらの木片の一つに字が描かれていた。

「多少佛心」

それを読んで、駄洒落好きの私は、心中、ホホ面白いなあ、と思った。

傍らに吐夢さんが起っていた。

私は、さっそく云った。

「ナカナカいいですね、時によったら拝借させていただいても、いいかしら？」

「どうぞどうぞ、そんなんで、およろしければ……」

と吐夢監督が云った。若い派手な服装をしていて、元氣であった。

私とは、戦後まもなく、新宿のハーモニカ横丁の屋台からの仲だったから、数えると二十数年の知己であるが、さいきんは、銀座裏の「エスポワール」あたりの酒場で、顔を合わしていた。

そういう酒場で吐夢さんは、潤達で、陽気で、仕事のはなしなど一切しないし、風容も、七十前後の人とは見えなかった。

さいきんの銀座は、減法、私と同時代の人々は姿を消している。

まして、私以上の年配者で、飲んでいる連中は少なくなった。仰山に云えば、寂として声なしと云ってもいいほどである。

世上、四五十は洩たれ小僧と云っているが、一般は、その洩たれ時代が過ぎたところくらいで、アソビのほうも、終止符をうっている。よく云えば、思慮分別だが、そして健康上の理由もあるのだろうが、一方から云うと気概のないこと夥しい。

日夜、そういうところに、得々として出入りしている私などにはそういう忿懣がある。

「イササカ小さい双六だね。上りが早いよ……」と心のなかで、そう思っている。

こう思ういは、以心伝心である。

私は、酒場で、吐夢さんと顔が合うと、すこし席が離れていても、やおら盃をあげて、合図をする。

先方も、その合図に答えて、盃をあげる。

「もっと飲んで、悠っくり行こうじゃないか……」と言外には出さないが、そういう合図なのだ。この乾盃は、私にとって、友、遠方より来るの感じでもあった。

よき酒友であった。

だが、その吐夢監督も、春の展覧会を終えて、まもなくして、映画「宮本武蔵」の大作に取り組み乍ら、その途上、斃れた。

そして今は、帰らない人となってしまうた。

私の記憶に間違いがなければ、展覧会の会場で、交わした会話が最後の言葉であったことに成る。

そのときは、私は、今は亡い故人に向って、「多少佛心」を賞め、いずれ拝借しますよと云ったのである。

したがって、この言葉は、私の発明では毛頭なく、会心作ではないかも知れないが、吐夢さんの遺作と云っても、よろしいのである。

冒頭から、題名などにこだわって可笑しいが、僅かなことながら、これも故人に対する冥福を祈る気持、そして礼儀でもある、とそんなことを、私は考えているのである。

思いなしか、と云っては、すこしとぼけた表現になるが、さいきんの私は、「多少佛心」読んで字のごとき、心境である。

別の言葉で云えば、愛欲道にかけて、いささか、中途半端なところを低迷している。

冴えないのである。

私の夜の銀座の散歩圏には、軽く数えて二十軒ほどの酒場があり、それらの店に、現在の時点で極秘裡に、ことを運んだ彼女たちは、十指に余るくらいいるが、そのいずれも、とくべつの成果を生んではない。

関係はあったが、語るに足る彼女たちは、一人としていないのである。

そのことは、恐らく、彼女たちからすれば、私のような男は、一見、賑やかではあるが、冷たい男、無情の男、燃えない男、頼りにならぬ男、さらに云えばエゴイズムいっぱい男として、映っていることであろう。

私は、彼女たちから、そういう眼で、みられている男に違いない。

私自身でさえ、そのことをウスウス感じているのである。

それでは、そんなことを感じながら、何のための、私の日夜の銀座行であろう。

私は、毎夕五時、社の仕事を終えたと、社のクルマで新宿から日比谷の支店にやってくる。

日比谷支店は、日比谷有楽街の、東宝ツインタワービルの一階にある。

エスカレーターで、階上にいく。右手全体が、売場に成っているが、左手が事務室になっている。その扉を押し、その一角にある、四坪ほどの部屋が、応接兼、私の部屋になっている。

夕刻五時半である。

私が自分の部屋に這入ると、まもなくして、女子社員の一人在、オシボリとその日の夕刊の四種類ぐらゐを、私の前のテーブルに置いていく。

「冷たい牛乳を……」

そして、隣接の食堂の、自動販売機から、ミルクが運ばれてくる。

私は腰のポケットから、小銭入りの皮袋を出して、十円玉をとり出す。

夕刊を読み了えてから「さて……」と私は考えるのである。

一滴も這入っていない素面で、私は考えるのである。店長がノックして這入ってくる。夕刻五時までの売上げの集計額である。

私はその数字をチラッと見ただけで、また私の考えを続行する。

つまり、この時刻からが、私の本番なのだ。私は今宵の日程について、考えるのである。どう費消すれば良いか。

金を捨てる場所の詮索である。

銀座に女はいるが、底根ぞっこんというのは、一人としていないのである。義理もない。

と成って、私は迷う。

行く的あてがないのだ。行く場所がなければ、家路を真直ぐ指したらいいわけだが、そんなことは毛頭、私の頭のなかにない。

家へ帰れば、浪費もなく、無事には違いないが、それだけである。それでは沈香じんこうもたかず、屁へもひらずの類いとなる。

銀座に、私の好きな女はいないけれど、好きな女を探そうという意欲は、私の念頭から離れたことはない。

泳いでいなければ、その機会はないのだ。

機会とは、どこにあるかわかっていないのである。暗中模索である。

暗中模索とは云い条、私には、たいがいの順路はわかっている。毎夜のことだから首尾のほど、わかっているのである。

退屈男である。旗本退屈男というのも、ほぼこういうのと同型なのではあるまいか、と時折、私は、私自身のことを考えたりする。

とみこうみ、私は、そういう時間を、この部屋で、一時間ぐらい消している。

そして時間である。私は腰をあげる。その時間がきても、私の行き先は、きまらないのだ。

私は重い鞆かばんを右手にし、ビルを出て、帝国ホテル方向に歩き出す。

心に決するところがないから、足も重いのである。遊興の馬鹿馬鹿しさが、私の脳裡をへめぐるっている。

数年前、私は友人にすすめられて、朝鮮人参を服用する習慣ができた。以来、身体も丈夫になったが私の酒量も増し、酒場の二三軒では、浮いた気持も、起らなくなってしまうている。

まして素面の足どりでは、どこをどう目がけて良いものやら、見当がつかないのだ。この夜また賽の河原の石くずしかと、そう思いながら行く私の肩のあたりの後ろ姿は、みられたものではないのである。

一見、派手にみえるが、私の夜な夜なの銀座行は、そういうところから、始まっている。

さきごろ亡くなった大宅壮一から、生前、私は擲揄されたことがある。

「きみのは、いつも振られの歴史だね……」と。

流石にズバリ云い当てている。

だが負け惜しみではないが、いささかこれは皮相な観察でしかない。

女との別れは、振られる型が、一番いいのである。上策なのだ。

私はそれを計算し、振られているのだ。

ずるさ、と云われても仕方がないが、例外は一二あるが、私という男は今日まで、女をフルに追いかけたことがない。

中途半端な男である。女のために一生を捨てるなんてことは、微塵も考えたことがない。

身も心も、おんなのために、というそんなことは、馬鹿げたことだ、と思っっているからである。それに断崖めいたところに立つことは、嫌いなのだ。

喧嘩^{けんか}論も嫌いである。

面子も大切だが、私はそういう折、率先してこちらから降伏することにしてはいる。理非よりも、相手が悪かっただけのこと、そういう場合は、降伏しても降伏したことには成らない、という論理が、私には優先する。

元に戻るが、私の銀座行は、前述したように、午後七時ごろから始まり、一転し、再転し、何回か舞台が暗転し、深夜の三時が、家への帰還時となっている。

積^{かち}の石を積み上げては崩し、崩しては積みあげ、その繰り返しである。

その懲りずまを、生きているのが、偽らざる私の日常である。乾いた酒、乾いた女、そして、乾いた感情のなかだけで、私は生きている。

そしてこれも、ことのついでだから、告白しておくが、私は週に一度、外泊している。

私の渋谷の自宅は、階下を長男夫婦に貸し与え、私は二階の二間つづき部屋に起居している。五十前後のお手伝いさんが、私の身边を世話している。

近くの派出所からの出張だが、品もよく、人柄で、一年以上、勤続している。

このお手伝いさんとの会話は、私は家のなかでは、無口のほうであるから、あまり交わすことはなく、用件ばかりで、彼女の家庭事情など一切訊^きねたことがないが、夫持ちではあるようだ。週に一回の休暇をとって帰る。

したがって、その手が無くなると、その空間の、私の身边は、僅かながら、階下の嫁の世話に成らなければならない。

そのことが、私の性分には、やりきれない、苦痛ではないが、心の負担になる。だから、私は、お手伝いさんが休暇で、家に帰る時間は、私も家を飛び出すのである。